〈書　評〉

村山　孚著『北京新歳時記』（三省堂）

（東京大学大学院博士課程）坂元ひろ子

本書は，1981年1月から一年間，『人民中国』に連載された「新北京歳時記」をもとに，加筆，改編したものだという。著者村山孚氏は1978年春から81年初冬まで『人民中国』編集員として夫人とともに北京に滞在，本書脱稿後の83年秋から再度，北京に滞在中とのこと。

本書の構成を紹介しておくと，まず中心をなしている「歳時記」部。「暖簾」（日本の「のれん」ではなく，防寒用の綿入れカーテン）の話に始まる1月から12月までの月毎の北京市民の行事，生活や風物を，著者の中国観なども織り交えながら書き綴っている。付録として「北京見どころ」「北京味どころ」があり，北京の一般的観光コースのほか，〝かくれた〟名所，住宅や商店，劇場，乗り物（「見どころ」），各種の名物料理や「小吃」（軽食），酒（「味どころ」）などを紹介している。著者自らの手になるものではないらしいが，イラストや写真も随所に配してある。

本書の狙いを，著者はこう語る。つまり，激しい歴史の波をくぐり抜けて大きく変化してきた「新しくて古い町」北京の「今の一般的市民の行事や暮らしぶり」を動態的にとらえ，あわせて日本の年中行事とのかかわりを探り，日中の交わりを考えようとしたのだ，と。

それゆえ，春節（旧暦正月），元宵節，清明節，端午節，中秋節といった伝統的行事をとりあげては，その由来や今日的変遷のありさまを描き，日本の行事とも比較する。そればかりではなく，三・八婦女節，植樹節，メーデー，国慶節といった新中国ならではの催し物にも伝統的行事と同様のスペースを与える。庶民の食生活に関しても，北京人のもてなしには欠かせない餃子や季節物の腊八粥，粽，月餅などの伝統的食品のみならず，新発売の鴛鴦氷棍（アベック・アイス）や毎夏のように品不足で騒がれるビールなどにも言及することも忘れない。また，たとえば日本の正月に当る春節に関連させて，「探親」（里がえり）や結婚の問題に触れたりしており，社会問題の考察にまでふくらませようとする試みもみられる。

私事になるが，評者も著者とはちょうどいれかわるように，81年秋から83年秋まで北京大学留学生として北京に滞在した。本書に記されていることの多くは自らの体験につながることであり，大変なつかしく読ませてもらった。同時に，著者と評者には戦争をはさんだ世代のひらきがあり，さらに，同じく中国滞在経験者といっても勤労者と学生という滞在形態の違いもあり，そのため本書で教えられたこともあったし，何かしらのひっかかりを感じたりもした。さまざまな世代の人が記した昨今の中国記を読みくらべてみても，そうした違いははっきりとあるように思える。

本書で感心したのは，著者が中国の人びとの生活の智慧ともいうべきことわざの類を多く採取していることだ。評者が日常的に接することになった学生を中心とする若い人たちからは耳にすることのなかった，興味深い言い回しが引かれている。寒暑の変り目に対応する着衣法「春捂秋凍」，極寒の時期を示す「腊七腊八凍掉下巴」といった季節感に富む類が中心だが，実に傑作なのもある。そのひとつが中国で今なお使われている干支（えと）の話にでてくる「カイコ年」（属蚕的）。腹の中は糸（同じくスーと発音する私にかける）でいっぱい，すなわち，腹に一物ある人のことだという。

滞在形態が異なると，接する人びとの層も異なり，知りうることも違ってくるものだとあらためて認識させられた次第だが，生活者としての重みという点からいえば，著者自身も言及するように，

北京市民の住居とは隔絶されたホテル住いの外国人という制約がやはりある。生活レベルでの著者の観察は，掘り下げ方という点でもの足りない。では著者が意欲的にとりあげる社会問題への考察はどうかというと，これは新聞等の記者の報道やルポルタージュの切り込みには及ばない。ついでにいえば，付録のガイド部分，ことに「味どころ」などは月並の域を出ず，しかも純然たるガイドブックほど実用的ではない。全体的にはこうした中途半端さを本書の弱点として指摘できるだろう。

だが評者にことさら強く印象づけたのは，著者の世代と恐らく深くかかわりあう中国観，中国への独特な思いのあらわれ方である。ひっかかりを感じたのも多くはこの点にかかっている。

著者のもつ世代的特色は，「歳時記」に七・七蘆溝橋事件を採用していることにとりあえずは見出しうる。「気が重いが」，「日本人として書いておかなければならない」と著者は判断したのであり，しかも今の日本が中国の現状を見下し，経済的，「島国的」思い上りがあるのではないかと「ちょっと心配」なのだ。著者が本書で唯一，この日を通化（東北地方）で迎えたというかつての中国体験に触れた八・一五の終戦（中国では「八一五光復」）の採用も，同様の契機からであろう。

一部の在中国，訪中日本人の目にあまる傲慢な態度には，評者にしても，「ちょっと」どころか非常に危惧を抱いたし，不快であった。それはそれで日本の社会に根ざす問題として考えなければならないし，日中間の歴史的事実を忘れたり，歪曲したりすべきでもない。だがそれをふまえた上で，中国をみる確かな目というものをもつべきだろう。

その点で気にかかる個所が本書にはいくつかあったが，その一例が著者の外国人料金制度に対する受けとめ方（付録で言及）。

中国の外国人料金制は，食事，宿泊，乗物から，時に展覧会や資料コピー等にまで及ぶ。内容的に差があるものもあるが，料金だけの違いの場合も多い。本書がとりあげている食事の問題に限ってみても，さまざまなケースがあるが，個室での食事は全く同じ内容，条件で，料金だけが外国人の場合，大体，高くなる。税金還付ともみなしうる粮票（穀物製品キップ）をもたない分，外国人に高い料金が課されるのはやむをえないとしても，二，三倍という大差には，著者のいう「がめついことで知られる某国人」でなくとも，おかしいと思う。

著者はこの制度に対して，物価政策と国際レートの不均衡，中国の「収入対応主義」の伝統などで「中国人の立場」を釈明しようとし，高料金が不満なら中国大衆向けのを利用せよ，という。しかし，その選択の自由さえ往々にして認められないというのが実状で，著者もそれを知らないはずはないだろう。

大体，外国人からは余計とって当然，というのでは，国際的に通用しないだろうし，中国人自身の精神衛生にとっても有害ではないか。外国人として率直にそういえばよいと思う。変に「気がひける」のは美徳とはいえまい。

外国人料金制に限らず，中国のさまざまな問題について，愚かな増長をすてた上で，クールな眼をもち続けることが，著者のいう「日中の交り」を考えてゆくためにもぜひ必要なのではないだろうか。

なお，本書には誤りとまではいわないが，適確でない記述もいくらかあった。たとえば，冬至に日本ではカボチャを食べたりするが，北京には特にそういうことはないらしい，と著者は記す。しかし，古くから冬至に餛飩（かつては餃子のことらしい）を食べる風習があり，今の北京でも餃子を食べるところがあると，新聞などでも紹介されている。参考までに。

（1984年1月刊。四六判，228頁，1500円）